



弘大農学部同窓会会報

第14号

平成5年10月20日 発行
発行 弘前大学農学部同窓会
TEL. 0172-36-2111
振替 盛岡4-564番
印刷 (株) 笹 軽印刷

農学部の改革

会長 中尾良仁

会員の皆様お元気ですか。会長職を引き受けたものの忙しさを口実に何ら見るべき活動もせず2年が過ぎてしまいました。

この間、名誉会長の正木農学部長をはじめ、農学部同窓会と永年のお付き合いのあった教官が現職を去られ、歳月の流れと、我々の年代のものにとって特に寂しさが感ぜられます。退官された教官の皆様方に、感謝と今後の御健勝をお祈りいたしたいと思います。

今年もまた、同窓会に119名の新会員をお迎えました。弘前大学の中でも農学部同窓会は体制が整っていると言われていますが、どうかその体を保っているとするれば、それは同窓生総数3,300余名を教える大世帯とい

うことと、これまでの歴史の積み重ねによるものであります。とほいうものの残念ながら財政基盤のぜい弱な現状では活動もままになりません。同窓会の目的の一つでもある母校の発展に積極的に寄与するためには、会員皆様の御協力を得ながら同窓会活動の活性化を図ることが今後の課題であります。幸い会員相互の親睦・連絡については、本部・支部事務局担当者の御支援により、それぞれの地域で励し合いながら活躍されている報に接しており御同慶にたえません。

さて国内では、バブル崩壊後の日本経済は不況から脱却できず、つい先の平成3年8月に言われていた「いざなぎ景気」を上回る好



白神山地の天然ブナ

景気が夢のようであります。内面的には農業と工業との較差が依然として増している中で、先進農業国では過剰農産物のはけ口を海外に求め貿易摩擦を喚起しております。日本市場の開放要求は今後増々その度を加え、国際化に対応し得る体質の強化が急務となっております。

世界の人口が加速的に増加し21世紀半ばには100億人に達すると推測され、世界的にみた場合一食糧事情はかなり深刻化しそうです。加えてエネルギーの大量消費や地球温暖化による悪影響等により、地球の環境は悪化の方向をたどり、生態系はくずれはじめ、その結果食糧生産に限界がくると言われております。21世紀はまちがいなく環境問題が最大の課題として取り上げられることでしょう。

昨年6月公表された「新農政プラン」でもはじめて、我が国全体で環境保全型農業を目指し確立すべきであるとの政策方向を打ち出しました。このような時あたかも、弘前大学の改革で教養部廃止に伴い農学部を環境学部、理学部を理工学部に変更するとの報道がなされました。現在平成6年度予算要望ということで準備がすすめられているようです。報道等によりますと「21世紀を目指す大学づくり」として、学際性・総合性・国際性・地域性等を提起され、農学や他の科学分

野を結集して環境問題を視野におく研究・教育を行うこととしているようであります。

農業に関する教育を受けたものとしては、もしも農学部という名前が消えるとすれば、心情的に惜別の念を禁じ得ません。

人類にとって欠くことのできない食糧生産という大きな責任を有する農業が、近年の農業のもつ暗いイメージからの脱却ということでは決してないと思うものの、その研究・教育の場からその名が消滅することは誠に残念でなりません。「名は体を表す」と言われます。農業県青森として、また地域に根ざした学問研究の場としての農学部を充実強化するために辿らなければならない唯一の路だとすれば、止むを得ない選択なのかもしれません。

別項でお知らせがありますが、今年度の総会を7月31日弘前市で開催することになりました。丁度夏休みで弘前のネプタや青森のネプタ祭りの直前であります。弘前を去られた多くの方々に、古き良さを残し大きく変貌しようとしている学都弘前に是非お出いただき、青春の一時を学問にいそしみ、友と語り合ったあの頃を思い出していただきたいと思っております。

会員皆様の益々の御活躍お祈り申し上げます。



「環境学部」に御理解を

菊池 卓郎

正木先生の後任として、4月以来学部長をつとめています。いま弘前大学は、教養部の廃止を軸に、全学的な改組に取り組んでいます。農学部は教養部や医療短大の一部の先生方の参加を得て、「環境学部」をつくるための準備を進めて来ましたが、これは全国の農学部にも例を見ない改革構想なので、地元新聞はもとより、一部の全国紙に報道されたため、

同窓会員の皆様から質問を受けることが多くなりました。地元の農業者や一般市民の方々の中には、「農業を見捨てるのか」との懸念を表明する方も少なくありません。

そこでこの機会に、環境学部構想を説明し、皆様の御理解を得たいと思っております。なお、環境学部は平成6年度概算要求として、これから文部省に提出しようとしているもので、ま

だ決定されたものではないことをお断りしておきます。

まず理屈は抜きで、環境学部の学科と講座の構成を以下に示します。()内は講座名ですが、従来の講座と違い5～10人で構成される大講座です。

① 農業生産科学科(農業生産学, 農業環境学, 生産機械学), ② 生物資源科学科(生物機能開発学, 生物資源利用学), ③ 北方圏自然環境学科(環境構造学, 環境進化学), ④ 地域環境工学科(水環境工学, 地圏環境工学), ⑤ 社会・文化環境学科(農業環境社会論, 環境文化論), ⑥ 附属農場。農場では主として農業短大を出て、将来自営を志す人を、3年生に編入生として受け入れ、実際の農業に密着した教育を行います。

こうして見ると、従来の農学部を充実させ、それに理系, 文系の学科を加えた構成になっていることがわかると思います。

以下、少し固苦しくなりますが、環境学部の理念の一端を説明します。

① 近年、農業の多面的価値が、世界的に注目されるようになりました。農業が自然環境だけでなく、地域社会の文化的、歴史的環境の保全と結びつき支えていることが、評価されるようになってきています。

② 環境論の視点から農業の多面的な役割が見直されつつあるいま、農学の枠組を拡大し、社会の期待に沿った対応が出来るようにすることが必要です。元来、農学は自然と人間・社会との関係を総合的に取扱う、唯一の教育・研究分野です。農学の持つこの多面性、学際性、総合性を活かし、これに環境論の視点から新しい役割を与えることこそ、21世紀へ向けての農学の取るべき道です。

③ 環境論の視点から農学を再編成することは、地域への貢献にもつながります。農業は青森県の基幹産業ですが、農薬や肥料の多投に依存する従来の量産型農業は、環境問題や健康問題からも、国際関係からも壁に突き当たっています。環境調和的な農業のあり方を研究し教育することは、21世紀の地域農業

の振興のために、何よりも大切なことではないでしょうか。

また青森県は、世界的・人間的遺産である白神山地の存在に象徴されるように、豊かな自然の残されている地域です。白神山をフィールドとする研究・教育によって、青森県の自然環境保全にも寄与することが期待できます。

③ 環境保全型社会への転換と環境調和による持続的発展は、地域や日本のみならず、国際的・人類的課題です。環境教育と結合させた専門教育を行うことによって、環境を視野に置いた(環境コンシャスな……これが環境学部構想のキーワードです)産業活動や経済活動、生活活動を営むことのできる人材を養成しようというのが、環境学部の教育目標です。

以上のように、環境学部は、農業を捨てるどころか、21世紀へ向けて農業の重要性が益々大きくなることを考えて構想された学部なのです。同窓生皆様の御理解と実現へ向けて御支援をお願い致します。

福島県支部総会のお知らせ

11月12～13日に篠辺三郎先生と斎藤健一先生をお迎えして開きますので多数の御参加をお願い致します。詳細は支部役員までお問い合わせ下さい。

関東支部総会のお知らせ

11月27日土曜日、篠辺三郎先生と斎藤健一先生をお迎えして、ニューピア竹芝(港区海岸1-11-1)で午後2時から開きます。多数の御参加をお願い致します。連絡先:真岩克己 日本利水設計K. K. TEL (03)5821-3911

忘れえぬ「ご苦労さん」

正 木 進 三

皆さん、長い間お世話になり、有難うございました。今年の3月末で定年退職しました。いまだに俗念去りがたく、朝から夕まで11時間ほどは研究室にいて、以前と変わらぬ仕事を続けています。博士課程の院生一人の研究を、来年度の修了までは見届けねばならないという、口実をもうけて居座っています。しかし一応の区切りですから、転居通知かたがたあちこちへ挨拶状を出したら、思いがけず多くの方々から、「長い間ご苦労さんでした」というねぎらいのお便りを頂いて有難く、温かい人の心に触れて感激しました。この言葉はまた、今では遠くに去ってしまった35年前の懐かしい日々を、私に呼び戻してくれました。

35年前……それは私が弘前に赴任した年でした。ようやく30歳になったばかりで、どちらかといえば精神も風貌も晩稲（おくて）の頃でした。引越し荷物を下宿まで運んでくれ



た運送屋さんに、「学生さんだはんで、安くしてやるべ」と言われても、ただ黙って法外に安い料金を払っただけ。でも大学では学生の皮を被っている訳にはいきません。学生の中には髭を生やして、思わず「先輩」と

声を掛けたくするような猛者が何人かいました。彼らからは私はきっと、新入の後輩に見えたに違いありません。

閉口したのは教職員の方々から、「先生」と呼びかけられることでした。初めのうちは私の後ろに、誰か先生が立っておられるのかと、思わず振り返ったものです。「先生」が私の事だと悟った時の、あの気恥しくていたたまれない、何処かへ消えてしまいたいような気持ちは、今でも忘れられません。中学生の時に読んだ〈坊ちゃん〉に登場する“教育がフロックコートを着たのが俺だといわんばかりの教頭赤シャツ”先生のイメージが私の脳裏に刻みつけられていて、「先生」にたいしてある種の偏見を抱いていた事が、いっそう心の平衡をかき乱すことになったのです。私にとって大学に職を得ることは、教育者ではなく研究者になることを意味していました。人間にとって価値ある営為の一つは真理の探求であり、それを目指す知性の集まりこそ大学である、という古風な理想主義がいつの間にか私の肌にも染み込んでいて大学の研究という側面だけに囚われていたからです。教育についてはまったく無知で、ただフロックコートを着たくはないという以外に、何の抱負も見識も持ち合わせていませんでした。

しかし講師として赴任した以上、講義をしないではすまされません。それどころか、昆虫学の教官は私だけだったので、講義、実験実習、専攻演習、卒論指導までなにもかも一人でやらねばならなかったのです。心中ひそかに「新天地ではすべてを研究に」と誓って、補助員をしていた三重大学を離れたのですが、早速これまで経験したことの無い講義の準備に取り掛からねばなりません。そのうえ前任者（故福島正三博士、3月19日逝

去、合掌)からの引継で、県農業講習所と文理
学部の講義も有無を言わず担当させられ、
四苦八苦。授業の前日は草案作りに追われ、
研究の時間がどんどん削られていくので、心
が細る思いをしました、そんな時に用事もな
いのぶらりと実験室にちん入し、30分も1
時間も平気で時間を潰す人があり、遂にたまり
かねてドアに「実験室での用談は3分以内
に願います」と貼紙をしました。これに尾緒
がついて語り継がれ、とうとう学会にまで広
がって伝説になってしまったようです。

自分の学習に少しでも役立てようという利
己的な発想に基づいて、私は教科書はいっさ
い使わず、原著論文やいろんな書物から資料
を漁り、1回毎にある程度まで完結性のある
読み切り講談を作る試みをしました。このや
り方では、自分の関心の高い研究分野や話題
に講義の内容が偏ることは避けられません。
それを意識しながらも、私はこの方針に固執
しました。自分が興味を持ってないことを、一
生懸命になって話せるわけがない、いやいや
話すのを聞いて面白いはずがない、というの
がその当時の私の論理でした。

私は生来、はにかみやなので、学会発表の
時には上がってしまっ顔が火照り、心臓の
鼓動が高まるのが常でした。そんな場面で物
おじせずに堂々と喋れる人を見ると、羨まし
く思ったものです。だから講義の前日からす
でに緊張して、なんとなく心が落ち着かない
状態に陥りました。学生達の視線を浴びて、
初めて講義室の教壇に立った時の気持ちは、
今でも忘れられません。それは旧師団司令部
の2階の1室で、冬には薪ストーブが焚かれ
て懐かしい木の香りが漂いました。

その頃大学での講義は、教授が準備してき
たノートを読み、学生はそれをまたノートに
書き写す、というやり方が普通だったようで
す。ところがある日、見なれぬ学生みたいな
男がこのこ教壇に上がってきて、いきなり
べらべらと喋り始めたので、学生達はずいぶ
ん戸惑った様子でした。しかし私の目標は、
学生達の関心を引き興味をかき立てることに

あったので、ノートを取りやすいように語り
の調子を変えることはしませんでした。私は
昆虫たちの生活の不思議さと面白さ、自然の
美しさと奥深さ、それを知ることの意味など
をなんとかして学生達に伝えたいと願いまし
た。緊張して言葉を探しながら90分の話を終
る頃には、声がかすれる位に疲れていました。

学生達はすぐに私のやり方を飲み込んで、
聞き耳を立ててくれるようになりました。そ
うなると、こちらの方でもだんだん話の調子
が熱っぽくなってきます。うまく話せた後の
充足感の心地よさは、格別なものでした。今
と違って、その頃の学生達はとても真剣だ
ったと思います。私と同じくらいの背丈の人が
多かったのは、同じ世代なのだから当然です
が、その中に目だった巨漢が二人いました。
この二人、いつも必ず並んで座り、そして必
ずひそひそお喋りを始める点でも、当時とし
ては例外的でした。声量が乏しい私は、講義
中にはあらゆる物音を極端に嫌います。二人
の私語が邪魔になると、口の筋肉が疲れて話
の流れが淀みます。なんとかして彼らを永久
に沈黙させる方法はないものかと思案の末、
ある日うまい手を思い付きました。

それは昆虫学汎論の講義の最中でした。午
後の日差しが南の窓から差し込んでいたから、
もうかなり秋が深まった頃だったのでしょう。
昆虫の変態のからくりを、黒板に貼った手画
きのチャートを使って説明していた時、あの
二人がまたぼそぼそとささやき始めたのです。
彼らはよほど愉快な事を話していたらしく、
だんだん声が大きくなってきました。私は頃
合を見計って、講義をピタッと中断しました。
二人は夢中になって話し込んでいるので、私
の沈黙に気が付かず、会話の中味が部屋じゅ
うに聞こえたのです。それはあちこちの下宿
のメッセンの品定めのようにでした。皆はそ
れを聞いて、どっと笑ったのです。ところが
夢中で話し込んでいた二人にはそれが分から
ない。私が何か駄洒落をいったのだ、と思っ
たに違いありません。講義を聞いている振り
をするには、笑わずばなるまい、というわけ

で、皆の笑いがおさまりかけた頃、二人の作り笑いが空々しい音波となり、それが遂に教室中の大爆笑を引き起こしました。彼らはまだ訳が分からず、きょろきょろ周りを見回しながら、笑いの渦に入り込もうとしています。見かねた周りの学生が「お前だ、お前だ、お前が笑われてるんだよ」と状況説明した時の二人の顔つきは、私にいささか後悔の念を起こさせるに十分でした。その後とうとうこの学期の最後まで、二人の私語を聞くことはありませんでした。

ほとんど毎日、準備に追われながらの講義でしたが、慣れるにつれて時には話すことが楽しくなり、修辞や声調にも気を配るようになったと思います。学生達が聞き入っていると感じた時には、思わず話に力が入ったものです。とにかくこのように1学期が過ぎて、大学での初めての講義も後5分で終わりという所まで漕ぎ着けた時の嬉しい気持ちは、何物にも代え難いものでした。しかし、この瞬間には大きい感動の波がその後に押し寄せるとは、まったく予期していませんでした。

「昆虫学汎論の講義をこれで終ります。」こう結んだ時、教室中の学生が一斉に「御苦労さんでした。」とってくれたのです。これば思いがけなかった、嬉しい衝撃でした。この一言は瞬時に私の心いっばいに広がり、これまで講義に投入してきた時間と労力を悔やむ気持ちを、たちどころに吹き飛ばしました。話自身が学生であった時、講師にこうしたねぎらいの言葉をかけたことがあったでしょうか。学友達からも、そうした話を聞いた覚えはありません。同じ世代の男が、ひたむきに語りかけた努力に、同情してくれたのか、講義の終わりの疲れきった様子を哀れと思っていたわってくれたのか、話の中味を評価してくれたのか、いずれにせよ、この「ご苦労さんでした。」はいつまでも私の心から消えることはありませんでした。これまで私は何度、この時のこの言葉を思い起こして勇気づけられ、励まされたことでしょうか。この言葉こそ定年の今まで私を支えてくれたのです。

35年目の心からのお礼を、どうか今受け取って下さい。この小文をあの時、講義室にいた学生諸君に捧げたいと思います。

同窓会役員に『環境学部』の説明

9月27日、午後5時より青森市の八甲荘において『環境学部』に関する説明会があった。出席者は、農学部から菊池農学部長、高橋秀直将来計画委員長、豊川教官、野村教官、竹村事務長、および同窓会事務局担当の3人、同窓会役員は中尾会長をはじめ12人、総勢20人であった。

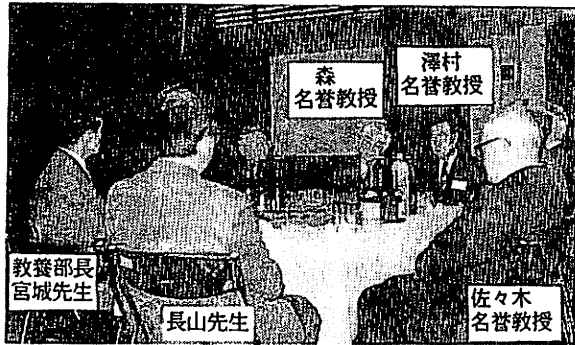
農学部長菊池先生が本会に寄せられた挨拶文の中に述べておられるように、教養部の廃止を契機に、農学部は教養部、医療短大の先生方の参加も得て環境学部設置の講想を提示した。これに対して各方面に色々な反応があったが、端的にいうと農学部をなくしてしまうのか、という意見が多いようである。このようなことから、母校の名称、あるいは存在の消滅を懸念される同窓生の方々に中味を理解していただくため、開催することになった。

最初に、菊池農学部長より、環境学部を作るようになった経緯、名称が変わっても従来以上に地域と密着した農学教育ができること、農学を軸とした、もっと広い視野での教育の必要性など概要の説明があった。また、高橋先生からはさらに細部の説明が纏々あった。

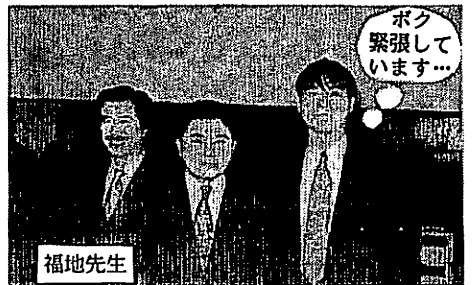
役員側からは、説明は充分理解できたとしても、学部の名称として『環境農学部』など『農』の字を入れることができなかったのかとか、全国的傾向にならって農学部を潰す必要はないとか、市役所で環境部といえど『ゴミ屋』だと、過激な発言も飛び出すなど、熱の入ったやりとりがあった。一応、役員諸兄の意見をまとめれば環境学部という名称は、多くの人々に理解されにくく、なじめないというものであった。

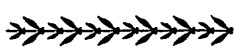
説明会の裏方を田村優一さん(46育種)がやって下さった。御礼申し上げる。

(塩崎 記)



卒業祝賀会





支部会活動報告



— 秋田県支部総会に出席して —

標記の会合は、平成4年9月26日(土)横手駅前温泉ゆうゆうプラザにて午後6時から開催された。小生は前日岩手大学で連合農学研究科(博士課程)の代議員会があって盛岡泊り。当日は正午過ぎまで田沢湖周辺で菌類採集を楽しみ大曲を経て横手に向かった。4時過ぎから出席会員が次々と到着、互いに旧闊を叙し、再会を喜び、近況を確かめ合う和やかな光景が続く。また裸の付き合いに大浴場に急ぐ人達も。やがて弘前より齋藤寛教官が到着。

総会は佐藤裕氏の司会で丹野貞男会長の挨拶に始まり、経過報告や活動方針について熱心に話し合いが行われた。次いで齋藤教官より農学部の改組構想などを交え現況の紹介があった。いよいよ懇談に移り、古い話新しい話取り混ぜて百家争鳴。尽きない話題も用意

周到な幹事の計らいで2次会をもって目出度く終了。齋藤教官と小生は幹事ご推薦の駅前ステーションホテルに快適な一夜を過ごし、翌朝思い出の横手を後にする。

出席者は次の21名：丹野貞男、佐藤牧生、松本勤、鳥潟貢、鈴木敏美、丹波仁、三森一司、伊藤公士、高松和雄、鈴木長彦、泉完、山口宏明、佐藤雄幸、佐々木均、佐藤裕、覚田雅則、佐山玲、加藤竹雄、田中正博、齋藤寛教官、原田幸雄教官。

最後に、丹野会長はじめ会員諸賢のご高配で楽しい会合に出席させていただき、また横手にゆうゆうプラザありと知ることができましたことに感謝します。本部の幹事には一切の旅行プランニングのお世話をいただきました。併せてお礼申し上げます。

(原田幸雄 記)



秋田県支部総会出席者

東青支部総会へ参加して (1992. 12. 25)

恒例の同窓会東青支部総会が青森市の八甲荘「デリシャスの間」で3年連続で開催された。

今回の東青支部総会は、例年と全く趣を異にしていた。これは、全て同窓会事務局の我がままによるものであり、東青支部会の皆様に心からお礼申し上げます。

ことの次第は次の通りである。

正木同窓会名誉会長（農学部長）が、平成4年秋の褒章受賞者として、紫綬褒章を受けたことである。同窓会事務局としては、全会員に呼び掛けて、喜びを共にしたい気持ちはあったが、陣容・日程・経費等の面で幹事一同思案に頭を悩ましていた。そこに、東青支部総会の相談が舞い込んできたのである。早速幹事会を開き、東青支部総会の場を借りて、同窓会役員が参加することにして、正木教授の紫綬褒章受賞祝賀会を併催することがベターであることを確認し、東青支部にその旨を要請したのである。東青支部事務局には、快

く受けていただき、紫綬褒章受賞祝賀会を70名参加のもとに行なうことができた。

この頃、農学部では大学の教養部廃止に伴う学部の改組問題が大きな比重を占めていた。農学部を仮称「環境学部」にしようという案を土台にして審議していた真最中の時であった。この案が地元の新聞にスッパ抜かれたのである。卒業生の皆さんは驚いたに違いない。学部長はなるべくはやい機会に「環境学部」について卒業生に説明したい意向を持っており、東青支部総会が最初の場となったのである。

このように、今回の東青支部総会は「紫綬褒章受賞」と「環境学部」に話題が集中したが、「環境学部」についてはなかなか理解が得られず、二次会においても学部長と同窓会長が更に話し合いを行なったが充分には納得されなかったようである。

農学部からは正木、工藤啓、塩崎、角野教官が参加した。（工藤啓一 記）

福島県支部同窓会（わんどの会） 総会開催される

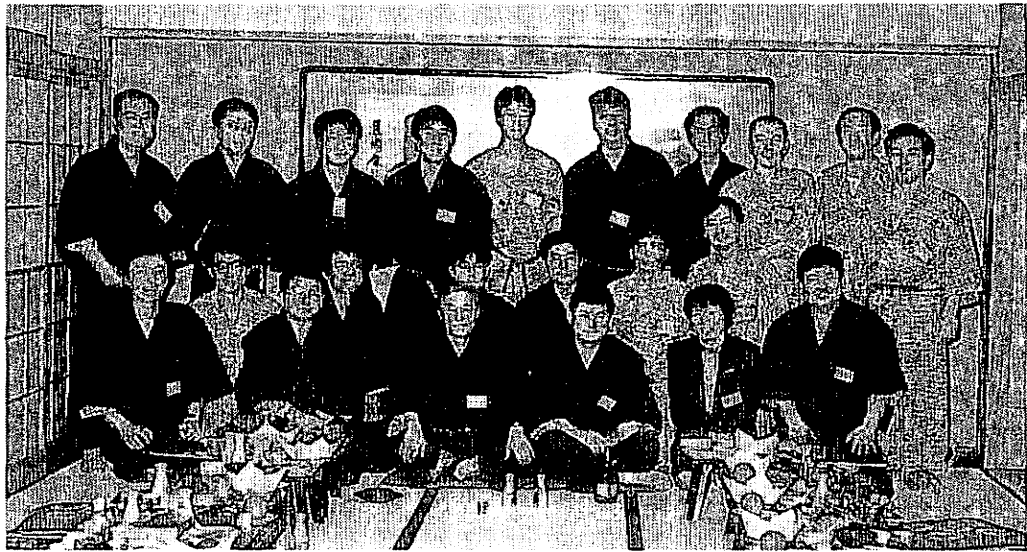
今回の会報でお知らせするには、だいぶ時間が経過してしまいましたが、平成5年1月31日福島市飯坂温泉「あづま荘」にて福島支部同窓会の総会が開催されました。会員61名中21名の出席者と農学部から前農学部長の正木進三先生と角野三好が参加させて頂きました。その会の模様を簡単に紹介致します。

総会は境支部長から総会の挨拶と正木先生にたいする紫綬褒章受与のお祝いの挨拶の後、会計（尾形さん）報告等は手短かに終了しようとの意見などで和気あいあいのうちに議事は終了しました。引き続き懇親会に入り自己紹介やら環境学部などの話題についてにぎやかに盛り上がりました。この中で、会員の出席率がなかなか上がらないので今後の課題と

したいなどの意見もありましたが昔話等に花が咲きあちこちで輪を作って話が尽きず、別の部屋へ二次会の場所を移して、林さんの持参した会津の「まぼろしの地酒」をいただきながら夜遅くまで酒を酌み交わしました。正木先生からは、こんど環境学部に移行した時には、「農学部同窓会の名称は福島県支部の名称「わんどの会」を譲りうけたらどうか」などのアイデアも出されました。

人は良し、酒は良し、温泉は良しの福島支部ですっかりリフレッシュし、飯坂を後にしました。皆さんどうも有り難う御座いました。

（角野三好 記）



わんどの会出席者

平成4年～5年 業務一覽

- 1992. 7. 15 同窓会会報 No.13号發送
- 1992. 9. 26 秋田支部 原田, 斉藤寛 (30,000) 横手市駅前(ユウコウプラザ)
- 1992. 11. 30 同窓会名簿 發送
- 1992. 12. 25 東青支部 正木, 工藤, 塩崎, 角野(正木紫綬褒章受賞祝賀会)
- 1993. 1. 30 福島支部 正木, 角野
- 1993. 3. 24 卒業祝賀会
- 1993. 6. 15 上十三支部 工藤
- 1993. 7. 31 同窓会總會 弘前(さくら亭)
- 1993. 9. 27 同窓会役員に対する環境学部の説明 青森(八甲荘)

教 官 人 事

退 官

- 長内英男 教授(生物機能開発学) 1993. 3. 31
- 音羽道三 教授(生物資源利用学) 1993. 3. 31
- 正木進三 教授(生物環境管理学) 1993. 3. 31

昇 任

- 青山正和 講師(生物資源利用学) 1993. 4. 1
- 石川隆二 助教授(生物機能開発学) 1993. 8. 16
- 川越信清 教授(農業土木学) 1993. 9. 1

新 任

- 武田 潔 教授(生物機能開発学) 1993. 4. 1

転 出

- 藤崎浩幸 助手(農業土木学) 一岩手大学へ
1993. 5. 16

遺伝子実験施設

- 赤田辰治 助教授 1993. 9. 1